

# ちよつといじ語

第二二〇号 心掛け次第

四

以前、衣食住のお話をしましたが、世の流れか、相変わらず氣にも留めない氣楽な性格からか、着る物は余り、食べ物は十二分すぎ、食べきれず棄て、財力も無いのに高額の物を買い、不相応な家に住む、昔から素寒貧（文無し・甚だしく貧乏）と言う言葉があるように怖いもの無しの様です。がしかし、「」のような借金してでも身を驕る（ぜいたく・いい気になる）生活を続ければ病に苛まれていく」とになりかねません。要注意分相忯にと 思います。残念ながら貧富の差と陰徳の差は比例してません。先師曰く、衣足らず、食足らず、睡眠足らず、これを三不足と名づく、退惰の因縁なり」と、物の大切さ、我が身の大切さ、我が心の大切さに繋がつていくと思ひます。知足足りて礼節を知る。満は欠ける。仏法に「森羅万象悉有仮性」とあり、世の中に存在するもの全てに仮性が宿つています。仮性を粗末にしないように。ある女優さんが病を抱え満身創痍ながら活躍している現状を鑑みますと、その女優さんは物を大切に扱われ、その物の命、紙一枚に至るまで大切に扱うとのコメントを聞くにつけ、その方の生き様に感服し納得いたしました。

朱熹の偶成詩に「未だ覺めず池塘春草の夢、階前の梧葉已に秋声、少年老い易く学成り難し、

一寸の光陰輕んずべからず」と。池の塘に春の草が萌える樂しい夢が、まだ覺めきらぬうちに、階の前の梧葉に秋風が吹いてきた。少年時代を楽しんでいるうちに、はや老境が迫つて来る」と。

正月に希望に満ちた計画を立てましたのに、早くも六月に入ります。弱つたものです。歳月人を待

たず」とは良く言つたもので、皆様方は如何でございましょうか。人生には「まさか」真つ逆さまと

いう坂があります。自分がという事態に遭遇しないように、「噩靈」に身を沈める事がないように

信仰のお蔭を頂きましよう。信仰はまず「正直」からです。昔から「正直は一生の宝」・「正直の頭

に神宿る」と言われています。神仏は華美的手助けはしてくれません。心の安らぎを与えて頂けるの

です。物欲で心を満たそうとされる方々には信仰は無縁という事です。聖徳太子は「世間虚偽、唯佛

是真」と、此の世は伴りが多いが、佛は真であると言われました。物欲の人は亡くなる時に物欲の処理が思う様に出来ず、悔いを残し、後世には諍いを残す人多し、我々は心を預けて命終を迎えることが必要であると思つています。肉体の消滅よりも心の消滅の方が大切であります。往生極楽です。これを仏教で安心と言います。自爆テロや中東での小戦が続いています。私も世界平和を望んでいますが、娑婆の世界は闘争・苦悩から逃れられません。しかしながら、先ずは檀信徒の方々の家庭が平和に温順である事を望みます。死んで持つていける財産は悲しいかな「たつたの大文」です。

和を以て貴しとなす」千坂秀学師は「大の和といいますのは「敬」の心がなければなりませんし、お互いの人格と言うものを尊敬し合う心がなければ、本当の「和」とはいえないと思います。そしてさらに「敬」は心が清らかでないと、人を心から尊敬することはできません」と、申されます。昨今スポーツマンシップがアメフトから大きな話題になっています。世の中を潤滑するルールがあります。法句經に「淨戒と正見をそなえ、法に依りて生活し、眞実を語り、自らその業をなす人、世は、かかる人こそ愛すなり」と。万民同士、愛し愛される人間となろう。